

研究報告

発達障害児の自己形成

—療育・教育活動への示唆を求めて—*

熊川 宏 昭**

本論では、発達障害児の自己形成に関する研究について、ダウン症、自閉症、その他の発達障害と大きく3つに分け、それぞれ客体としての自己認知に関する研究、主体としての自己表出に関する研究について概観した。その後、今後の研究の方向性について若干検討した。

キーワード：自己 自我 自己意識 自己認知 発達障害

I. はじめに

「自己とはなにか？」この問題は、哲学における論争をまつまでもなく、発達を論じる上でもっとも重要な課題のひとつであることは、今日、意見の一致を見るところであろう。

これは無論、障害児の発達、そしてそれに基づいた教育の分野でも例外ではない。例えば岡崎(1991²³)は、「人とかわりながら自己と他者を分化し、他ならぬ自己を確立する視点は、精神発達遅滞児の教育には不可欠である」と述べている。また山本(1988²⁷)は、「障害児については、これまで知的発達の側面をとらえようとする研究は数多く行われてきた。しかし、人格発達、自己意識の発達に関する研究はあまりすすんでいない。障害児に対する身体認識の発達に関する研究は、その障害の特質を解明する手がかりと教育方法についての示唆を与えるのではないと思われる。」とし、同じくこの分野の研究、それに基づいた実践の必要性を説いている。さらに麻生(1985¹)は、ワロンの理論、あるいは現象学の理論を背景にした障害児の自我形成研究が出現してきていることを、障害児をトータルにとらえようとする療育活動と密接に関連して生み出されたものであるとしている。

このように、障害児の自己形成の問題は、療育・教育活動と密接に結びつき、かつその問題の中核と考えられる。さらにこのテーマ自体、従来はまったく触れられなかったこれなかったもの(麻生, 1985¹)である。

よって本論は、発達障害児の自己形成に関するいくつかの研究をひもときながら、その知見を若干整理し、今後の療育・教育活動への示唆を提供できればと考える。

なお、本論では、今回、ダウン症、自閉症、その他の障害と大きく3つに分けて整理していきたい。また、それぞれの内容は、岡崎(1991²³)の論を受け、客体としての自己の認知、主体としての自己表出に関する研究、に大別して考えていきたい。

II. 障害種別の自己形成に関する研究の概観と療育・教育活動への示唆

1. ダウン症

ダウン症(以下、DS)については、すでに岡崎(1991²³)により、最近の研究について概観がなされている。それによると、DS児の社会性、中でも他者とのかわりを通して形成される自己認知については、乳幼児期から遅滞を示す研究結果が多いとしている。ただし、この遅滞についても、本人の反応の微弱さと、対人的対物的応答性の欠如などの環境要因との相互作用による特性形成が考えられ、そのメカニズムに関する検討が課題であるとしている。

* Development of self for child with developmental disorders—suggestion to care and education—.

** 福岡教育大学障害児治療教育センター研究部員(第1部門)
福岡県立田主丸養護学校

次に、具体的な自己形成に関する研究、ここでは、先の岡崎(1991²³)の提示している課題を受けて主体としての自己表出、あるいはその周辺に位置する研究について見てみたい。まず、岡崎(1991²³)もあげているが、松島(1989¹⁸)について見てみる。ここでは、DS乳児の主体的な自己表出を「仮面行動」(真の感情の隠蔽)のレベルでとらえ、その発達を事例に即して検討し、以下の結論を得ている。

- (1) 養育者との情緒的共生段階ののち、鏡像段階(Lacan, 1949¹⁵)にいたるまでの期間に、「仮面行動」の発現時期が存在する。
- (2) 「仮面行動」は内的仮面行動(養育者以外の人に対する真の感情の隠蔽)と外的仮面行動(養育者に対する真の感情の隠蔽)とから成る。内的・外的仮面行動は、二重構造をとりながら、1歳代前半と1歳代後半の2段階を特徴を持って出現する。第一段階から第二段階への移行には、養育者のイメージの内在化と乳児の身体的自己の意識化が重要な意味をもつ。
- (3) 以上の発達の視点を取り入れることで、乳児の主体性および「適切な母親(環境)」(Winnicott, 1965³⁵)についての親の理解を促し、親カウンセリングの充実を期待しうる。

また、長崎(1992²¹)は、コミュニケーション発達の側面から、健常(以下、NR)乳幼児とDS乳幼児の追従注視(visual following)を実験観察により比較検討する中で、追従注視を「『他者の関心』に関心を示す」という、乳幼児の「心の理論」(Theory of mind, Frith, 1989⁸; Leslie, 1987¹⁶)の発達を示す原初的な行為ととらえ、考察を加えている。

それによれば、DS児における相互的注視行為は、NR乳幼児と同様「『自己への関心』への関心」から「『他者の関心』への関心」という関心対象範囲拡大の様相を示していたものの、「『自己への・他者への関心』への関心」の注視行為の頻度はNR児に比べて極めて少なく、またNR児で示された主導化の過程は不明瞭で、母親主導に偏る相互交渉の実態が示された、としている。

さらに長崎(1992²¹)は、以上のような特徴に対し、早期教育による発達促進プログラムでの配慮点に述べている。その中で、「対人的相互交渉に際しては、自己や他者への関心を注視以外のモデルティによっても補足・強化し、その頻度を増

加させる必要がある」と述べている。

2. 自閉症

自閉症については、近年、Rutterの認知・言語障害説からKannerの仮説への回帰、あるいは先に述べた「心の理論」などにより、人との関係性、そこから波及して自己形成への関心もさらに高まってきているように思われる。

まず、客体としての自己認知に関する研究からみると、百合本(1980³⁸)は、二人の自閉症児を観察する中で、子どもたちが、現実の他者と向き合わず、鏡を仲立ちとして他者との関係を結ぼうとする。他者と体遊びをしながら鏡のほうばかり見ていたり、他者に向けるべき表情を鏡にだけむけたりする。そういう対鏡行動が、他者と直接関わることができる前段階として続いた、としている。また百合本(1980³⁸)は、「自分のなかに他者を見る他者をもつ」ことができれば、この種の対鏡行動を含めて自閉症状が大幅に解消すると考えている。

Ferrari & Matthews(1983⁷)は、自閉症における自己認知の欠如が自閉症特有のものか、単なる発達遅滞かについてRouge-Taskを用いて実験を行っている。さらに担当教師の質問紙項目との相関も検討し、自閉症における自己認知の欠如は自閉症特有のものではなく、発達遅滞の一つであると結論づけている。

Dawson & McKissick(1984⁶)は、自閉症児の社会的関係の希薄さの原因の一部として自己認知の障害があるという仮説を検証するため、15名の自閉症児に、自己認知課題と物の永続性、身振り模倣の課題を行っている。その結果、物の永続性と自己認知に関連が見られたとし、自閉症児の社会的関係の希薄さという障害は、自他の区別の欠如によるものではないと結論している。

またSpiker & Ricks(1984³¹)は、52名の自閉症児に鏡像認知の課題を行い、同時にその他の資料との関係も分析している。その結果、自己認知が見られなかった自閉症児は伝達的な発声が見られなかったとしている。

和田野(1991³⁴)は、一人の自閉症女児を2年間にわたり追跡し、自閉症における対鏡行動の意味について考察している。そして、(1)百合本(1980³⁸)が自閉症を鏡像段階にとどまっているものととらえ、対鏡行動の意味を分析しているのに対し、本事例においても対鏡行動は鏡像段階で

多くみられたが、鏡像段階を過ぎて対鏡行動が見られなくなっても「自閉性」はなお残存していたことから、(1)対鏡行動は鏡像段階に多く見られるが、鏡像段階と「自閉」とは、直接に関係がないこと、(2)対象児における対鏡行動が現実世界からのひきこもり、自己認知、自己の客観化を促す一つの手段、という2つの意義をもっていたこと、(3)対鏡行動の減少後に見られた、描画や作詞といった活動が、対鏡行動と共通の基盤を成していることを見出している。

飯野(1988¹²⁾)は、NR児群、発達遅滞児群、自閉症児群について、鏡像認知課題(ルージュ課題、自己命名課題)と、日常生活の観察を行い、比較検討している。その結果、自閉症児群においては、自己形成過程において、自己と他者の身体図式を対応させるような活動である模倣に重要な意味のあることを示唆している。

さらに別府(1994b³⁾)は、自閉症児が Rouge-Task での視覚的自己鏡像認知の際、殆ど恥ずかしがるなどの反応がないという先行研究の結果に対し、何らかの反応があるのではないかという仮説を検証している。その結果、自閉症児においても困惑を何らか示す反応を示す者が一定存在することをあきらかにしている。

次に主体としての自己の表出に関連した研究を見てみる。

小林(1993¹⁴⁾)は、自閉症の精神病理の特徴を Stern(1985³²⁾)の自己感の発達理論により理解しようと試みている。そして、「自閉症に見られる種々の臨床症状に共通して見られる自己の客体化の病理は、主観的自己感の生成過程より以前の中核的自己の問題といえる。」結論づけている。さらに小林(1993¹⁴⁾)は、自閉症者のもつ苦悩や環境世界との関わり方の特徴は、寡症状性分裂病の基本的な精神病理として語られてきた「自明性の喪失」とも合い通じる現象であるとし、自閉症に見られるこのような類似現象は、「自明性獲得困難」とも表現されるものであるとしている。

続いて大柴(1993²⁴⁾)は、言語能力に問題の少ない、正常知能の自閉症児、いわゆる「高機能自閉症」児について、自己像の形成過程を検討している。その結果、小学校段階においては、低学年の時期に、自己を認知的かつ行動的、主体的に定位できるようになったものの、それが、母親との関係と、友達が自分の家に来た時に限られていた、

中学年の時期には、質問癖やチック症状などを呈した、高学年では、自己の問題に気づき始め、自分と人との違いにこだわり出す、などの諸行動が見られたとしている。また、この事例の検討を通じて大柴(1993²⁴⁾)は、「高機能自閉症」児の内的世界へ接近する方法として、作文や詩、文章完成法などの文字言語による投影的技法を工夫して内的な世界を把握した上で、そこへ係わっていくことも十分可能であろうと示唆している。

さらに大柴(1994²⁵⁾)は、上記の自閉症児の小学校時代の自己像の形成過程の基盤となった体験と考えられる諸側面の発達について検討している。そして、本児が排泄習慣の習得過程で長期間にわたり混乱を示したこと、身体感覚や身体機能を含めた自分自身の「からだ」に関する意識の発達、およびそれらを基盤とする自己意識の形成・発達に、大きなつまづきがあったことの一つの現れとも考えられること、全身の動きをとまなう運動が身体像の獲得から自我「主体」のイメージを形成したであろうこと、などを見出している。

また別府(1994a³⁾)は、話し言葉をもたない自閉症幼児における特定の相手の形成を考察する中で、自閉症の特定の相手の形成は、密着的接近→不安・不快な場面で求める関係→不安に立ち向かう安全基地としての役割を果たす関係、の3つの異なるレベルを移行するとしている。そして、密着的接近→不安・不快な場面で求める関係への変容が、他者認識や自己認識の成立と連関することを明らかにしている。また別府(1994a³⁾)は、上記の密着的接近→不安・不快な場面で求める関係の変容には、密着的接近対象の拡大を媒介としていたことから、不安・不快な場面で求める関係を成立させるために必要な、他者にある意図をもった存在として認識させる成立過程として、以下のプロセスの存在を想定している。まず、単一の密着的対象の成立からその対象が拡大する中で、特定の行動や場面と快-不快の情動の随伴性の理解が成立する。そして特に快の情動と随伴した行動や場面の中で特定の相手が誉めたり、共感したりすることが、快の情動の共有経験を生み出す。そして、この快の情動の共有経験を多くの人々と持つことが、特定の相手を行動や場面に結び付けるだけでなくその内面である情動や意図を持った存在と認識させることになる、としている。

3. その他の発達障害

まず、客体としての自己認知に関する研究からみてみると、相馬・新井(1986²⁹⁾)は、精神薄弱児21名を対象に、Bertenthal & Fischer(1978⁵⁾)、百合本(1981³⁹⁾)の鏡像認知課題、さらに写真課題を加えた7課題を用いて、自己認知を検討している。そして、その結果として、(1) Where-Self-Task (「・・・ちゃんどこ?」の間に鏡の自己像または自分自身を指さすことができるかを見る)、Rouge-Task で正答率が60%を越えたことから、NR児で2歳以降に成立する鏡像の自己認知は、知的遅滞を示す精神薄弱児においても、生活年齢の基準を越えれば成立すること、(2) Rouge-Task、Name-Task (自分の鏡像を「誰ですか?」と問われて名前を言えるかを見る) は共に鏡像の自己認知として同じ段階にあるにもかかわらず、Name-Task の正答率が極めて低かったことから、精神薄弱児は自己認知は可能であるが、ゆるぎない自己像を確立するための象徴機能がまだまだ十分に発達していないと考えられること、(3) Toy-Task (自分の背後の人形を鏡の中に見て30秒以内にとることができるかどうかを見る)、Where-the other person-task (他人の鏡像を見て、「・・・さんどこ?」の間に他人の実物を指したり、実物の方に振り向くことができる:) が正答率50%以下であったことから、精神薄弱児は〈自己〉を対象化して客観化すること、即ち脱中心化が困難であると考えられること、の3点を見出ししている。

さらに上記の研究の延長として、相馬・久保庭(1987³⁰⁾)は、Rouge-Task を除く4課題を用いて精神薄弱児とNR児の比較をおこなっている。その中で、統計的有意差はなかったものの、Name-Task を除いて精薄児の方がNR児よりも正答率が高かったことから、生活年齢がその要因として働いたと考えられること、NR、精薄群ともに5-6歳児群では、正答率が Where-the other person-task に比べ、Toy-Task で低下していたことから、一度成立した(4歳以前)のものであっても、6歳半までは恒常的に成立していることを意味しないという鏡像認知の不安定さを示していると思われること、また研究全般を通じ、Where-Self-Task の正答率がNR、精薄群とも低かったこと、4歳児群と5-6歳児群の正答率の変化のパターンが異なっていることを考え合わせると、認知機能の面で4歳児と5歳児ではその様相が異なることが推測されること、などを見出ししてい

る。

Zisfein & Rosen(1974⁴⁰⁾)は、4つの自己概念尺度の臨床的有效性について検討し、4つの尺度に有意な相関があったこと、評定者が専門家、非専門家に関わらず、この尺度が、精神遅滞者の自己概念の評定に有効であること、などを見出ししている。

Ottenbacher(1981²⁶⁾)は、31名の精神遅滞児について、自画像と自己認識の測度得点との関係について検討している。その結果、5つの自画像の変数(自画像得点、自画像のサイズ、年齢、性別、IQ)のうち4つまでが自己認識得点と有意な相関があったとしている。

さらに飯高ら(1982¹³⁾)は、学齢前の言語発達遅滞児に対し、子どもにとって身近な自己や他者の身体部位名称の理解の課題の指導を通して、自己の認識や他者との関わり方について検討している。その結果、以下のような結果を得ている。

- (1) 身体概念の改善度は、理解語彙年齢の上昇、集団活動への出席率と参加態度、また保育園での身辺自立習慣形成、他者への関心の深まり、保母の指示理解、自己統制力、母親の母子集団活動参加態度、家庭学習の取り組みの姿勢などに関する評定結果と有意な正の相関(1%水準)を示した。
- (2) 身体部位名称検査は、精神遅滞の場合には健常児の初期発達と同様に、当初は他者に対する得点がやや高い。加齢と共に、自己、他者、絵の順に得点差が見られる。一方自閉的傾向を示す事例の場合は検査不能、あるいは自己に対する反応が主としてみられ、彼らの自己中心性、ひいては対人関係の困難さを浮き彫りにした。すなわち、身体概念の発達は他者との相互関係を通して培われるものであり、言語そのものの特性を反映していると言える。

また森(1984¹⁹⁾)は、高度難聴児2名の自我の形成過程を、話しことばの発達という観点から検討している。それによると、自己中心係数(牛島他, 1943³³⁾)は話された文数が少なかった3歳台までは正常児に比べ著しく高く、話された文数の増加に伴い、4-5歳台で正常児の係数に近くなった、話しことばの発達は自我形成上において大切な役割を演ずること、等を見出ししている。

続いて主体としての自己の表出に関する研究について概観する。中田(1984²²⁾)は、重障児にお

ける経験構造を解明するために、現象学的視座から重障児の意識の能作をその機能において、すなわち、自我の機能それ自体の機能の仕方について、いくつかのタイプをあげて検討している。そして、知覚の発達が遅れている重障児および多動な重障児といわれる子どもたちは、その自我が習性の自我でなく、自我自身が機能していないとしている。また操作活動が遅れている重障児といわれる子どもたちは、特定の働きかけが与えられた時のみ彼らの自我が機能するようになっていること、自閉的傾向の強い重障児といわれる子どもたちは、その自我が自我の機能において自らを触発し続け、古い能動性を今の自我の能動性に帰属させている、なおも妥当している習性の自我であることが理解される、などとしている。

山口・浜田(1992³⁶⁾)は、脳性マヒ児における病態失認の問題を取り上げながら、身体図式と自己の形成について論じ、病態失認は感覚運動レベルの身体図式と概念レベルの身体図式の織りなすギャップから生じるとしている。さらに各レベルの身体図式形成には、他者との関係性が深く絡んでいるとしている。

また、古田(1993³⁷⁾)は、言語の獲得に先立つ他者との同型的な「身体」の形成(麻生,1992²⁾)、あるいは自我形成の基盤として「身体」がまとまりをもち外界との関わりの中で機能していくことの重要性(浜田,1992¹¹⁾)から、姿勢・運動面での遅れが顕著な精神発達遅滞児にとって、「身体」の発達と外界の関わりが、どのような関係にあるのか事例検討を行っている。その結果、浜田・山口(1984¹⁰⁾)が、身体がまとまりをもっていく姿勢的緊張と外界との関わりとの関連について述べているように、自ら座位姿勢をとろうとすることが関係活動の変化の契機になっていったと結論している。

Ⅲ. おわりに

以上、発達障害児の自己形成に関しての研究をいくつか概観し、療育・教育活動への示唆もいくつか見出し出されたように思われる。そして、その示唆は一言で言えば、「自己形成に果たす他者との関係の重要性」とも言うべきものではなかったかと考える。

次に、この分野の今後の研究の方向性について考えてみる。

村井(1989²⁰⁾)は、これまでのNR児の鏡像認知に関する研究を整理し、「鏡の像を自己の像であると理解できるためには、二つの過程が区別されると思います。一つは、鏡の像を他者と思っている段階から自己と思える段階への発達であり、いま一つは、実物と思っている段階から映像であるということが理解できる段階への発達です。この二つの過程は現実場面では関係しあいながら発達するのですが、理論上は別の過程として区別できます。しかしこれまでの研究ではその区別が曖昧です。」と述べているが、これは対象が発達障害児でも同じことがいえるのではないかと考える。むしろ、発達障害児の場合、発達上にNR児より複雑な連関及び問題をはらんでいると考えられるので、この点は、客体としての自己認知に関する研究に限らず、発達障害児の自己形成過程全般の解明において特に留意すべきことであろう。

また、前述の村井(1989²⁰⁾)の見解に関連するが、岡崎(1991²³⁾)は、鏡像が非現実化し、その鏡像を自分と認めるその後の段階では、具体的場面から離れても外から見た自分の顔をイメージとして所有することが要求されるとしている。そしてそのためには自己と他者の分化および「他者としての自己」をとらえる視点の転換が必要であるが、その基盤として他者や仲間との交流経験は不可欠であり、DSにおいて、その経験の偏りがどう早期の対応で援助され、いかに自己の対象化を促すかは今後検討されるべきとしている。前述したように「自己形成に果たす他者との関係の重要性」は、療育・教育活動への示唆としてだけではなく、本論で概観してきた研究の基本的テーゼとして現れ、また、本論の冒頭でも少し触れたように、現在の自己形成研究での基本的仮説であると考えられる。しかしながら、その実証はいま始まったばかりであると考えられ、その点で、岡崎(1991²³⁾)の課題は大いに検討されねばならないだろう。

さらに白石(1989²⁸⁾)は、自閉性障害の心理学的研究を概観する中で、「自閉症児の自我形成過程への関心が高まっている。今後は、交互対称性(白石,1984²⁷⁾)の獲得・否定、あるいは形式的顕在化などと関連させた慎重な研究がなされていくことだろう」と述べている。これは、発達における自己形成に関わる諸要因の解明およびその連

関を検討することの重要性を示唆しているものと考えられる。

このように、発達障害児の自己形成に関する研究は、まだ未解決の課題が山積しているが、前述したように、発達障害児の一人一人のより深い理解と関わりに寄与する大きなヒントを秘めていると考えられ、さらに検討を積み重ねていく必要があるだろう。

文 献

- 1) 麻生 武(1985): 自己意識の成長. 児童心理学の進歩1985年版, 金子書房, 163-187.
- 2) 麻生 武(1992): 身ぶりからことばへ 赤ちゃんにみる私たちの起源. 新曜社.
- 3) 別府 哲(1994a): 話し言葉をもたない自閉性障害幼児における特定の相手の形成の発達. 教育心理学研究, 42(2), 39-49.
- 4) 別府 哲(1994b): 自閉症児の鏡像認知—ルージュ課題の反応を通して. 日本教育心理学会第36回総会発表論文集, 541.
- 5) Bertenthal, B.I. & Fischer, K.W. (1978): Development of self-recognition in the infant. *Developmental Psychology*, 14, 44-50.
- 6) Dawson, G. & McKissick, F.C. (1984): Self-recognition in autistic children. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 14 (4), 383-394.
- 7) Ferrari, M. & Matthews, W.S. (1983): Self-recognition deficits in autism: Syndrome-specific or general developmental delay? *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 13(3), 317-324.
- 8) Frith, U. (1989): *Autism: Explaining the enigma*. Basil Blackwell Ltd. (富田真紀・清水康夫訳(1991): 自閉症の謎を解き明かす. 東京書房.)
- 9) 古田直樹(1993): 早期療育への発達検査の活用をめぐって—姿勢・運動発達に遅れのある精神発達遅滞児の間身体性について—. 日本教育心理学会第35回総会発表論文集, 71.
- 10) 浜田寿美男・山口俊郎(1984): 子どもの生活世界のはじまり. ミネルヴァ書房.
- 11) 浜田寿美男編著(1992): 私というものなりたち. ミネルヴァ書房.
- 12) 飯野容子(1988): 身体像に関する研究—鏡像認知と自己意識の発達の関連に視点をあてて— 福岡教育大学大学院教育学研究科学校教育専攻修士論文抄録, 39-44.
- 13) 飯高京子・久我静枝・小沼政子・宮下 智・中村 操・外村晶子・阿部カネ・千田孝子(1982): 言語発達遅滞児における身体概念発達の促進指導. 東京学芸大学特殊教育研究施設報告, 32, 17-44.
- 14) 小林隆児(1993): 自閉症—その多様な臨床症状をどのように理解できるか—. 臨床精神医学, 22(5), 575-581.
- 15) Lacan, J. (1949): *Ecrits*. Editions du Seuil. (宮本忠雄他訳(1977): エクリ I 弘文堂)
- 16) Leslie, A.M. (1987): Pretense and representation: the origin of "theory of mind". *Psychological Review*, 94, 113-125.
- 17) Mans, L., Cicchetti, D. & Sroufe, L.A. (1978): Mirror reaction of Down's syndrome infants and toddlers: cognitive underpinnings of self-recognition. *Child Development*, 49, 1240-1250.
- 18) 松島恭子(1989): ダウン症乳児における「仮面行動」の出現と自他意識の発達. 心理臨床研究, 7(1), 31-44.
- 19) 森 寿子(1984): 話しことばの発達より見た高度難聴児の自我の形成過程—2症例の比較検討—. 聴覚言語障害, 13(4), 187-197.
- 20) 村井潤一(1989): 発達の基本問題. 杉田千鶴子・島 久洋・島山平三編著 教えと育ちの心理学. ミネルヴァ書房, 3-23.
- 21) 長崎 勤(1992): 健常乳幼児とダウン症乳幼児における相互的注視行為の発達—追従注視による共同注視とアイコンタクトの成立過程の分析を通して—. 教育心理学研究, 41(2), 47-56.
- 22) 中田基昭(1984): 重症心身障害児の教育方法現象学に基づく経験構造の解明. 東京大学出版会.
- 23) 岡崎裕子(1991): ダウン症乳幼児における社会性の発達—自己・他者認知を中心に—. 特殊教育学研究, 29(3) 55-59.
- 24) 大柴文枝(1993): 幼児期に発達の遅れのみられた子どもの自己像の形成過程—自己意識と他者意識の関連性を中心として—. 国立特殊教育総合研究所紀要, 20, 35-43.
- 25) 大柴文枝(1994): 幼児期に発達の遅れのみられた子どもの自己像の形成過程(その2)—身

- 体感覚・意識・行動の発達をめぐって－. 国立
特殊教育総合研究所紀要, 21, 67-75.
- 26) Ottenbacher, K. (1981): An investigation of
self-concept and body image in mental retarded.
Journal of Clinical Psychology, 37 (2), 415-418.
- 27) 白石正久 (1984): 1 歳児における交互対称性
の獲得について. 乳幼児保育研究, 11, 16-34.
- 28) 白石正久 (1989): 自閉性障害研究の到達点 4
心理学研究. 障害者問題研究, 57, 20-26.
- 29) 相馬壽明・新井信子 (1986): 精神薄弱児にお
ける鏡像の自己認知について. 茨城大学教育学
部紀要 (教育科学), 35, 105-110.
- 30) 相馬壽明・久保庭尚子 (1987): 精神薄弱児に
おける鏡像の自己認知について. 茨城大学教育
学部紀要 (教育科学), 36, 79-85.
- 31) Spiker, D. & Ricks, M. (1984): Visual self-
recognition in autistic children. Child
Development, 55, 214-225.
- 32) Stern, D. (1985): The interpersonal world of
the infant. Basic Book, New York. (小此木啓
吾・丸田俊彦監訳、神庭靖子・神庭重信訳
(1989, 1991): 乳幼児の対人世界 理論編、臨
床編. 岩崎学術出版社.)
- 33) 牛島義友他 (1943): 幼児の言語発達第二編,
幼児の文章の構造. 愛育研究所紀要, 教養部第
二輯, 55-79.
- 34) 和田野康子 (1991): ある自閉症児の発達にお
ける対鏡行動の意味について. 大谷女子大学文
学部紀要, 126-143.
- 35) Winnicott, D.W. (1965): The Maturation
Process and the Facilitating Environment.
London: Hogarth Press and the Institute of
Psycho-Analysis. (牛島定信 (1977): 情緒発達の
精神分析理論. 岩崎学術出版社.)
- 36) 山口俊郎・浜田寿美男 (1992): 私の身体が
「私の身体」であるということ. 浜田寿美男編
著 私というもののなりたち. ミネルヴァ書
房, 21-40.
- 37) 山本政人 (1988): 自己意識の発達と身体
の認識－ワロン, H. の考察を手がかりに－. 教育
学論集 (中央大学教育学研究会発行), 30, 131-
149.
- 38) 百合本仁子 (1980): 自閉症と鏡. 石川 元編
現代のエスプリ 155号 鏡と人間の心理. 至文
堂.
- 39) 百合本仁子 (1981): 1 歳児における鏡像の自
己認知の発達. 教育心理学研究, 29, 261-266.
- 40) Zisfein, L. & Rosen, M. (1974): Self-Concept
and Mental Retardation: Theory, Measurement,
and Clinical Utility. Mental Retardation, august,
15-19.